

ライフスタイルの側面に注目した旅行現象の分析

安達 寛朗, 寺崎 竜雄

これまでの旅行現象の分析は、性別や年齢、居住地といった旅行者の外面的特長を旅行内容と結びつけるという研究が多勢を占めてきた。そこで、本研究では旅行者の内的面的特長であるライフスタイルに注目し、これが旅行現象を分析する上で有効な手段であることを検証し、ライフスタイルと旅行タイプとの関係について分析を行った。また、実際に海外旅行についてライフスタイルによる分析を行い、海外旅行者数の増減の要因の考察や今後の予測を行う上での有効性を示した。

キーワード：旅行現象，ライフスタイル，海外旅行

1. はじめに

これまで行われてきた旅行者と旅行内容の関係についての分析は、性別や年齢、居住地などの旅行者の外面的特長を旅行内容と結びつけるという調査研究が多勢を占めてきた[1]。確かに性別や年齢によって好みの傾向は異なり、観光地によっては客層がはっきりと分かれる場合も多い。

一方で、同じ性別でも旅行先は人によって千差万別であるし、同じ熟年層でもよく旅行に出かける人もいればあまり旅行に出かけない人もいる。また、最近では社会が成熟するに伴い、観光対象への働きかけ方や観光対象そのものといった旅行の内容は、さらに多様化が進んでいる。かつては団体旅行に代表されるようにみな同じような旅行をしていたのが、情報技術の進歩もあいまって、今では十人十色、もしくは一人十色とまでいわれるようになった。このように、これまでの分析では必ずしも現在の観光現象を把握するには不十分であると考えられる。

しかし、観光交流を地域振興に結び付けようと活動している多くの自治体や、伸び悩みを見せている観光産業にとって、旅行者のニーズや動向を把握することは大変重要である。また、観光現象の多様化の背景に社会の成熟があることをふまえれば、社会学的見地からも重要であるといえる。

そこで本研究では、新たに生活のスタイルや習慣、価値観といった旅行者の内的面的特長に注目した分析を提案し、旅行行動を分析する上での有効性について検

あだち ひろあき, てらさき たつお
財団法人日本交通公社
〒100-0005 千代田区丸の内1-8-2

証することを目的とする。

2. 調査方法と分析の流れ

2000年10月と2003年10月に、ライフスタイルと直近一年間に行った旅行について、郵送法によるアンケート調査を行った。ライフスタイルに関する設問では、価値観や生活スタイルなどライフスタイルを構成する要素40項目について、“よくあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの4段階で質問した。旅行内容については、旅行タイプごとに過去一年間の旅行実施の有無を質問した。なお、旅行タイプについては表1のように整理し、特にライフスタイルと関係が深いと考えられる“観光レクリエーション旅行”と、“組織が募集する団体旅行”を分析対象とした。

調査対象者は18歳以上の日本全国の居住者で、被験者の居住地の比率は都道府県ごとの人口比となるよう調整してある。アンケート配布数は両年とも4,000票ずつであり、回収率は2000年が58.0%、2003年が59.8%であった。なお、本研究では両年のデータをあわせて分析している。

このアンケート調査の結果をもとに、因子分析を行い40項目の要素からライフスタイル軸を作成した。次に、因子得点を元に、各ライフスタイル軸にあてはまるグループ、あてはまらないグループ、どちらでも

表1 旅行タイプの区分と定義

旅行市場区分	旅行市場の定義
観光レクリエーション旅行	個人的な楽しみのための観光旅行。スポーツ旅行。旅行会社のバック旅行に参加した場合も含める。
帰省や家事のための旅行	帰省や冠婚葬祭関連の旅行。(帰省ついでに行った観光旅行は観光レクリエーション旅行)
組織が募集する団体旅行	町内、農協、郵便局、信金、宗教団体、サークルなどが募集する旅行。
出張や業務旅行	打合せや会議、視察目的の旅行。
会社がらみの団体旅行	職場旅行や招待、親交旅行。団体で行動する旅行。

ないグループの3グループに、各グループの被験者が同数となるように分け、直近一年間の旅行の実施とライフスタイル軸の関係について、オッズ比による分析を行った。

3. ライフスタイルと旅行実施の有無の分析

3.1 ライフスタイル軸の作成

まず、40項目の要素を集約してライフスタイル軸を作成するため、エカマックス回転を伴う主因子分析を行い、スクリープロットの様子から因子軸の数を五つに決定した。その結果ライフスタイル軸として、人と積極的に関わり流行にも敏感な「活動志向」軸、信念を持って日々努力する「自己研鑽志向」軸、周囲の目や先のことは気にせずにしたことをする「道楽志向」軸、正しく理にかなっているかを重視する「正論志向」軸、不安感を感じやすい「悲観志向」軸を抽出した(表2)。

なお、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性は0.799

であり、因子分析が妥当であることを示している。

3.2 ライフスタイル軸の特徴

次に、ライフスタイル軸の特徴を性年齢別の観点から明らかにするため、性年齢別に因子得点の平均点を算出しグラフ化した(表3)。その結果、「活動志向」軸では若者の得点が高く50歳以上ではあまり変化がないこと、「自己研鑽志向」軸では若いほど得点が低く男女間の比較では男性の方の点が高いこと、「道楽志向」軸では若者の得点が高く“30~39歳”で男女間の差が開くこと、「正論志向」軸では若者の得点か低く男女間の比較では女性の方の点が高いこと、「悲観志向」軸では若者の方が得点が高い傾向にあることが分かる。このように五つのライフスタイル軸は、年齢や男女といったライフステージによっても異なることか分かる。

3.3 ライフスタイルと旅行の実施

ライフスタイルが旅行の実施に与える影響を明らかにするため、過去一年間の旅行実施の有無に対する各ライフスタイル軸にあてはまるか否かのオッズ比[2]

表2 因子分析によるライフスタイル軸の作成

	第一因子軸 「活動志向」	第二因子軸 「自己研鑽志向」	第三因子軸 「道楽志向」	第四因子軸 「正論志向」	第五因子軸 「悲観志向」
人から誘われるのを待つより自分から積極的に誘う	0.46	0.20	0.08	0.11	-0.07
はやりの洋服やアクセサリーはすぐに買う方だ	0.45	-0.01	0.11	-0.14	0.16
自由な時間は、大勢でワイワイ楽しむのが好きだ	0.44	-0.05	-0.05	0.01	0.10
旅行や遊びの計画では、幹事役を務めることが多い	0.41	0.25	0.00	0.09	-0.08
都会的なにぎやかさが好きだ	0.40	0.04	0.14	-0.15	0.11
流行をつかむための情報収集はおこたらない	0.34	0.20	0.13	0.01	0.11
電車の中でも平気で携帯電話で話することができる	0.24	-0.04	0.21	-0.22	0.13
予め自分に用事があっても友人の誘いには応じる方	0.21	0.09	0.02	0.06	0.13
自由な時間は、1人で過ごすのが好きだ	-0.32	0.17	0.19	0.06	0.02
自分自身の能力を高めるため努力してる事がある	0.16	0.54	-0.01	0.31	-0.07
社会的に評価されたいので厳しいことに挑戦	0.23	0.49	-0.01	-0.02	0.17
こんな生き方をしたいという考えをもっている	0.09	0.49	0.00	0.24	-0.15
政治の動きをとらえるため新聞は必ずみている	-0.01	0.48	-0.14	0.20	-0.11
自分らしく生きるために人に頼りたくない	-0.20	0.46	-0.07	0.08	-0.05
経済的豊かな生活をしたのできつい仕事こなす	0.08	0.32	0.02	-0.05	0.22
常識に反しても、ワクワクすることをしたい	0.14	0.05	0.53	-0.02	0.11
自分の好きな事できれば周りの評価は気にならない	-0.08	0.24	0.49	0.09	-0.24
まじめに働くより、楽しく過ごす方が賢い生き方	0.10	-0.15	0.48	-0.24	0.19
周りに迷惑がかかっても自分が楽しむようにしてる	0.15	0.02	0.47	-0.13	0.05
楽しくない仕事はやりたくない	0.00	-0.09	0.39	0.05	0.14
先のことは考えず今を楽しく過ごすようにしてる	0.02	-0.09	0.31	-0.01	0.06
苦労は金を払ってもしろという考えはほかけてる	-0.03	-0.13	0.31	-0.22	0.09
楽しい生活を送るために、家族に頼っている	0.21	-0.26	0.29	0.07	0.21
“おたく”といわれても気にならない	-0.11	0.20	0.25	0.15	-0.19
学校で学ぶことは社会に出てから役に立たない	-0.02	-0.03	0.25	-0.20	0.18
実生活に役立たない教養を身につけても意味ない	0.00	-0.05	0.21	-0.21	0.19
社会のために、役に立ちたい	0.13	0.30	-0.20	0.43	0.06
環境を守るためにやっていることがある	0.03	0.27	-0.17	0.43	-0.02
自然に囲まれていたい	-0.20	0.15	-0.05	0.38	0.06
人にプレゼントをするのが好きだ	0.33	0.01	0.00	0.37	0.12
メーカーより、品質や値段を重視する	-0.25	0.03	0.08	0.35	-0.04
流行にとらわれず、自分らしい洋服を買う方だ	-0.12	0.02	0.16	0.33	-0.05
自分のしていることをほめられるとすごくうれしい	0.24	-0.14	0.11	0.29	0.23
自分の親を尊敬している	0.08	0.09	-0.13	0.28	0.00
電車で体の不自由な人に席譲らない人に注意する	0.12	0.25	-0.07	0.26	0.07
将来のことを考えると、不安になることがある	-0.13	-0.01	0.04	0.07	0.48
まわりの友人から、取り残されないうちにしている	0.27	-0.16	0.07	-0.07	0.46
人生は短い、というあせりがある	-0.03	0.14	0.08	0.00	0.46
自分のスケジュールが埋まっていなくて不安	0.33	0.13	0.09	-0.01	0.34
占いは信じる	0.21	-0.15	0.10	0.06	0.28
回転後の累積負荷量平方和	5.21	10.41	15.15	19.40	23.02

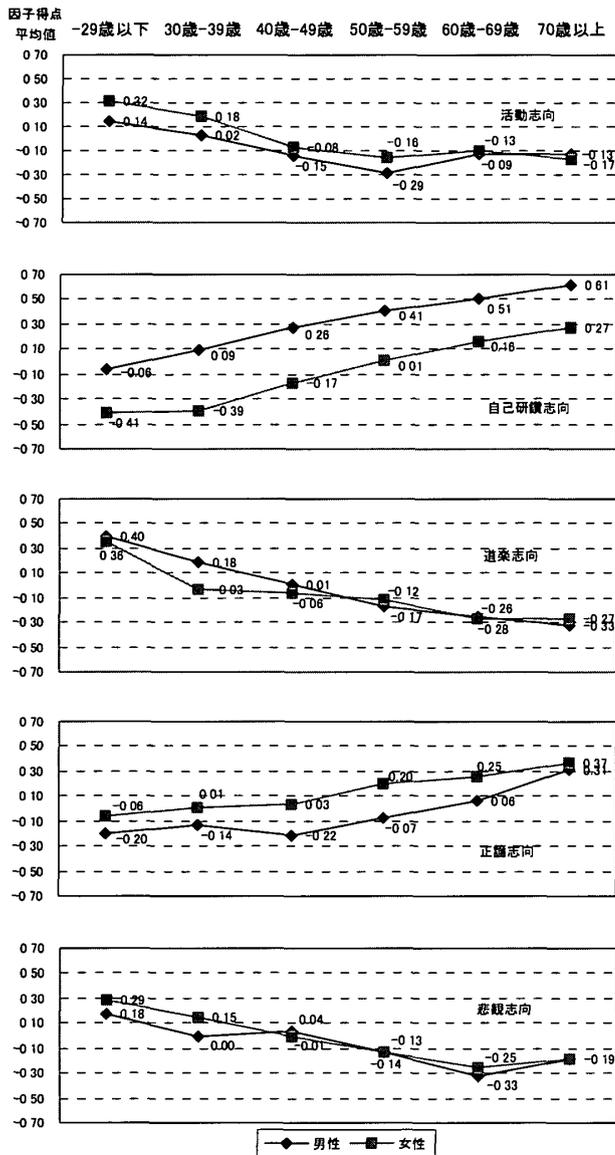
因子抽出法 主因子法 回転法 Kaiserの正規化を伴うエカマックス法 表中の数値は回転後の因子負荷量

を算出した(表4)。ここでは、オッズ比が高いほどそのライフスタイル軸にあてはまる人の方が旅行を実施する確率が高い、ということを示している。

まず、国内旅行では「活動志向」軸と「自己研鑽志向」軸、「正論志向」軸でオッズ比が1以上をとることが多く、旅行の実施にプラスの影響があることが分かる。

「活動志向」軸では、特に宿泊旅行、日帰り旅行と

表3 性年齢別のライフスタイル軸の因子得点



もに“観光レクリエーション旅行”において5%有意となっている一方、“組織が募集する団体旅行”ではオッズ比がほとんど1と同じもしくは1未満となっており、「活動志向」軸は、団体旅行にはほとんど影響していないが個人旅行の実施にはプラスの影響があることが分かる。

「自己研鑽志向」軸と「正論志向」軸では、逆に“組織が募集する団体旅行”のオッズ比が高くなっており、団体旅行の実施に対してプラスの影響がでており、団体旅行の実施に対してプラスの影響がでており、ただ、「自己研鑽志向」軸では国内宿泊旅行の方が、「正論志向」軸では日帰り旅行の方がオッズ比がやや高くなっており、「自己研鑽志向」軸では宿泊旅行、「正論志向」軸では日帰り旅行においてライフスタイルの影響が強く現れる傾向にあることが分かる。

一方、「道楽志向」軸と「悲観志向」軸は、国内旅行ではすべてオッズ比が1より小さくなっており、この両軸は国内旅行の実施に対してマイナスの影響を及ぼしていることが分かる。

海外の観光レクリエーション旅行では、「活動志向」軸、「自己研鑽志向」軸、「道楽志向」軸でプラスの影響を与えている。特に「道楽志向」軸では海外旅行の実施にのみプラスの影響を及ぼしていることが特徴的である。一方、「悲観志向」軸ではマイナスの影響が出ていることが分かる。

4. ライフスタイル分析による海外旅行の分析

4.1 年齢別によるライフスタイル分析

次に、実際にライフスタイルの側面から海外旅行の動向について分析していく。

昨今の海外旅行動向の特色として、若年層の海外旅行離れに言及されることが多い。そこで、過去一年の海外旅行実施の有無に対するライフスタイルに当てはまるか否かのオッズ比を、年齢別に算出した(表5)。

これより、「活動志向」軸と「自己研鑽志向」軸において5%有意となる年齢層が多くなっており、表4の結果と同じ傾向となっている。ただし、“29歳以

表4 旅行の実施に対するライフスタイルのオッズ比

		活動志向	自己研鑽志向	道楽志向	正論志向	悲観志向
国内 宿泊旅行	観光レクリエーション旅行	1.97*	1.49*	0.84*	1.13	0.74*
	組織が募集する団体旅行	0.90	2.26*	0.71*	1.98*	0.76*
日帰り旅行	観光レクリエーション旅行	1.58*	1.11	0.90	1.25*	0.91
	組織が募集する団体旅行	1.01	1.78*	0.59*	2.30*	0.73
海外旅行	観光レクリエーション旅行	2.58*	1.65*	1.26*	1.17	0.74*

* 5%有意

表5 海外旅行に対するライフスタイルのオッズ比

	活動志向	自己研鑽志向	道楽志向	正論志向	悲観志向
29歳以下	2.12*	1.82*	1.59	1.51	0.84
30-39	2.78*	2.02*	1.29	0.91	0.76
40-49	3.62*	2.04*	1.21	1.00	0.85
50-59	2.48*	1.70	1.19	1.38	0.52*
60-69	2.41*	1.50	1.07	1.30	0.84
70歳以上	2.43	1.92	0.68	1.17	0.15

* 5%有意

下”では「活動志向」軸、「自己研鑽志向」軸ともに5%有意となっているものの、オッズ比自体は“30～39歳”、“40～49歳”よりも小さくなっている。このことから、若年層では「活動志向」軸、「自己研鑽志向」軸の得点が高くても、他の年齢層ほどには海外旅行をしておらず、収入などの経済環境などが強く影響していると考えられる。

4.2 因子得点によるクラスタ分析

ライフスタイル軸の作成の項で行った主因子分析における因子得点を用いて、被験者のクラスタ分析を行った。ただし、被験者数が多く全被験者による分析が困難であったため、SPSSの機能を利用しランダムに全体の約50%を抽出し、分析を行った。

その結果、「活動志向」軸と「悲観志向」軸の得点の高いAグループ、「自己研鑽志向」軸の得点が高く「道楽志向」軸と「正論志向」軸の得点がやや高いBグループ、「自己研鑽志向」軸以外の軸すべてで得点が低いCグループ、「活動志向」軸の得点がやや高く「正論志向」軸の得点の高いDグループ、「自己研鑽志向」軸の得点が低いEグループに分類された。

ここで、過去一年間で海外旅行に行った人の割合が最も高かったのはAグループで、その他のグループを大きく引き離していることが分かる。これはAグループの「活動志向」軸の得点が高いためと考えられる。だが、Aグループは一方で海外旅行の実施にマイナスの影響を与える「悲観志向」軸の得点も高く、「活動志向」軸の影響を弱めていると推察される。

また、海外旅行によく行くのはAグループだけであったが、このグループに属する者の全体に占める割合はわずか14.3%である。このことから、海外旅行者数の伸びには、一定の限界があることが予想される

表6 クラスタの特徴

クラスタ	A	B	C	D	E	
構成比	14.3%	19.9%	14.4%	19.1%	32.4%	
活動志向	平均値	0.94	-0.17	-0.61	0.30	-0.17
	分散	0.36	0.69	0.34	0.56	0.44
自己研鑽志向	平均値	-0.09	0.81	0.29	0.04	-0.57
	分散	0.32	0.40	0.53	0.46	0.48
道楽志向	平均値	0.23	0.48	-0.54	-0.66	0.23
	分散	0.46	0.59	0.43	0.41	0.59
正論志向	平均値	-0.16	0.51	-0.41	0.55	-0.38
	分散	0.34	0.36	0.42	0.44	0.48
悲観志向	平均値	0.66	-0.09	-0.56	-0.24	0.18
	分散	0.27	0.51	0.59	0.51	0.55
性別	男性	35.1%	54.5%	64.8%	38.7%	37.2%
	女性	64.9%	45.5%	35.2%	61.3%	62.8%
	合計	100%	100%	100%	100%	100%
年齢	-29歳以下	33.7%	17.9%	7.6%	13.2%	25.5%
	30-39	27.8%	17.7%	12.1%	21.3%	29.5%
	40-49	21.2%	17.2%	23.4%	20.0%	22.0%
	50-59	9.7%	21.6%	22.4%	19.2%	12.1%
	60-69	5.2%	19.4%	27.6%	21.6%	9.5%
	70歳以上	2.4%	6.2%	6.9%	4.7%	1.4%
	合計	100%	100%	100%	100%	100%
過去一年間で海外旅行に行った人の割合	全年齢	16.7%	12.9%	11.4%	10.9%	9.2%
	-29歳以下	20.6%	11.1%	13.6%	15.7%	13.8%
	30-39	13.8%	12.7%	11.4%	9.8%	7.3%
	40-49	19.7%	5.8%	5.9%	9.1%	6.3%
	50-59	7.1%	19.5%	13.8%	10.8%	6.3%
	60-69	20.0%	14.1%	15.0%	13.3%	12.9%
	70歳以上	0.0%	12.0%	5.0%	0.0%	11.1%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	

表中の“平均値”と“分散”は因子得点の平均値と分散

(表6)。

このライフスタイル分析を長期にわたって実施し、経済の動向や社会情勢の変化などの分析に加えることで、海外旅行者数の動向をより精緻に予測し、その変化の原因を捉えることができると考えられる。

5. まとめ

本研究では、現代日本人のライフスタイルを5軸抽出し、その特徴や旅行の実施に与える基本的な影響を明らかにした。また、海外旅行を例にライフスタイルの側面から実際に分析を試みた。今後は、ライフスタイルの構造をよりよくあらわすよう要素項目の改善と、旅行先や滞在先での行動など旅行の質まで分析を掘り下げることで、ライフスタイル分析の現実的な観光客の誘客や販促活動への応用などが課題として挙げられる。

参考文献

- [1] 財団法人日本交通公社 旅行者動向2003, 2003
- [2] 柳川 堯 離散多変量データの解析, 共立出版, pp 1-21, 1986